東京朝刊 2022/06/18(土)

川本 三郎 評（評論家）

旅は終わらない

紀行作家という人生

芦原伸著（毎日新聞出版・2090円）

70歳を超えなお「学び」の途上

「世界の五大陸、七つの海を取材旅行した。年間一〇〇泊ほど旅を枕として過ごしてきた」という旅行作家が、学生時代と旅を仕事としてきた四十年を振り返る。

好きなことを仕事にする。羨ましい。世界各国、日本各地を旅している。といっても冒険家、探検家ではない。民俗学者、宮本常一を尊敬するというだけに思索の旅といえばいいか。その土地の風土、生活、歴史に注目してゆく。だから旅とは「学び」であるという。

一九四六年生まれ。北海道大学でロシア文学を学ぶ。ドストエフスキーの影響を受ける。大学時代に道北を無銭旅行。金がなくなり釧路駅の待合室で寝泊まり。当時の国鉄はまだ管理化されておらず貧乏旅行者に寛大だった。

釧路に近い鶴居村の酪農家のところで働く。牛舎の糞掃除から牧草刈り、乳搾り、放牧と夏から秋にかけて働く。身体を使って働いたことが大学生活で感じた心の空虚感を吹き飛ばしてくれる。この体験が著者の原点になったようだ。

大学時代は全共闘運動の激動期。運動に共感したが、山登りでも単独行が好きなので組織には加わらず。それでも権力への反骨精神を大事にし、卒業後、大企業に就職する道は選ばず、東京に出てアルバイト暮らし。

全共闘運動のいいところは、こういいい意味のはぐれ者を生んだことだろう。

開高健に惹かれるようになったのもこの頃。二十六歳の時に鉄道ジャーナル社という小さな出版社に入社。そこではじめて旅を仕事にする。いい先輩に恵まれる。

木曽の森林鉄道や、門司から京都までの最長距離鈍行列車、ブルートレイン「あさかぜ」などの取材を通していよいよ鉄道の旅と、紀行文を書くことが好きになる。旅の原稿では「感動した」「美しい」「おいしかった」などは禁句と学ぶ。具体的に書く必要がある。

七六年、三十歳を機に会社を辞めてフリーに。フリーは気持ちの上では自由だが、経済的には厳しい。来る仕事は何でも引き受けた。当時、旅のブームが始まっていて旅のガイドブックを何冊も作った。ただ、それだけでは満足しない。宮本常一、開高健、あるいは鉄道紀行の先駆者、宮脇俊三、種村直樹をお手本にする。

このガムシャラに働いた時代は著者の自己形成期だろうか。

八〇年代のバブル期、海外旅行が盛んになる。著者もケニア、イギリス、モロッコ、イスタンブール、アメリカ南部、シベリア、と海外へ出る。なかでも現代のシルクロードを鉄道で旅するのは凄い。

どの旅でも著者は宮本常一の「辺境にこそ歴史の真実がある」を心に刻む。そういえばフリーの物書きも出版界の辺境だ。

フリーの人間が仕事しやすいように著者は何度か、志のある者どうしでいわゆる編集プロダクションを作る。しかし、うまくゆく時もあるが、小さな会社は景気に左右される。次第に離れてゆく。

そのあと、著者は東日本大震災に衝撃を受け、東北に三年、十三回通い、惨劇の実情を書き上げる。これは大きな仕事になった。さらにノンフィクション作家として、小泉八雲、イザベラ・バードら日本を旅した西洋人の評伝を書く。

七十歳を超えたいま「旅はまだまだ終わらない」という著者に拍手を送りたい。

(c)毎日新聞社　無断転載、複製を禁止します。